
二百文字詩集「コトダマのざわめき」

那音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二百文字詩集「コトダマのざわめき」

【Nコード】

N4052Y

【作者名】

那音

【あらすじ】

今日もコトダマが響きます。

あなたを愛しているから

あなたがいて、その隣に僕がいる。

当たり前かもしれないけど、これがすごく幸せだと思う。

一人きりでは生きられない弱い人間の僕は、こんなにも愛しい人に出会うことができた。

それは、計り知れない奇跡。

何も言わなくても、あなたのことが手にとるように判るから、きっとそういう運命なんだね。

言葉にしたら嘘になってしまいそいだけど、僕はあなたと出会えて幸せなんだ。

もっと近くにいれるように、もっとあなたを知りたいんだ。

いつまでも

いつだって一緒にいれるように、ボクの中に強くキミを残そう。

いつだって思い出せるように、キミを強く覚えていよう。

死んだからって忘れられる程度にキミのこと好きだった訳じゃない。
い。

カタチはどうあれ、ボクたちは永遠を手に入れたんでしょう。

だから、がんばって思い出すよ。

このくしゃくしゃの泣き顔を笑顔に変えてしまっ、キミの声を。

きつとすぐに笑ってみせるから。

キミがいなくても大丈夫なように、強くなってみせるから。

うまく笑おうとしなくても

うまく笑おうとしなくても、きみが笑えばそれだけで空が晴れていくようだよ。

まるで世界中の幸せをここに集めたような、そんな感じ。

なんだかね、見ていだけで心がすっきりするんだ。

苦しいとき、辛いとき、何度も思い出しては歩みを進めてきたんだよ。

うまく笑おうとしなくても、きみはずっと輝いているよ。

そんな小さなことでくよくよしないで、もっと大きな声で語ろう。

うまく笑えなくても、夢はどこかに行ったりしないから。

えっとね、

ボクにはもうわからないんだ。

キミが好きすぎて、なにが正しいか正しくないかがわからない。

うまく言葉にできても、それは当たり前のことです。

ボクがキミをどんなに好きかは、案外伝わったりしない。

まるでやりがいのあるゲームみたいに、いつまでたっても進みやしない。

だけど、きっと無駄じゃないと思うんだ。

……えっとね、キミが大好きなんだ。

今日は、それが言えればいいや。

じゃあね、また明日。

明日はうまく言えるといいな。

おしおき

君にいじわるなことを言った。

君がおかしな顔をした。

ボクはちょっと残念になって、君に話しかけ続けた。

好きになるのは罪なの？

だったら、好きになってもらえないのは罰なの？

会いたいと思うのは罪なの？

だったら、会えないのは罰なの？

それとも、おしおきとかいう温いものなの？

だめだよ。

君に会えないのはいやだけど、君がいやな顔するのはもっといや。

だから、ボクは黙って、おしおきを受け入れるよ。

大丈夫、心配ないからね。

かぞえきれない

今日また、きみがすてきだと思った。

これでもう何度目だろうね。

今日また、きみがかわいいと思った。

これでもう何度目だろうね。

別れはいつも突然だけど、そんなのあまり関係ない。

どんなに離れていても、すぐそばにいるような安心感。

きみがくれた言葉のぬくもりは、まだ冷めてないよ。

今日また寂しいと思った。

これでもう何度目だろうね。

今日また泣きたくなった。

思いつきり泣いてみた。

初めて泣いてみた。

静かに心が揺れたよ。

きみのきもちもわからないのに。

きつとボクだけは、きみを喜ばせることができると思い込んでた。

どんなにひどいこと言ってたって、笑えば許してくれると思ってた。

ボクだけがきみの理解者でいるつもりだった。

きみのきもちもわからないのに。

きみが初めて泣いたとき、ボクの胸に稲妻が走った。

その痛みを盾にして、涙を見ない振りした。

きつとうまく笑えると思い込んでた。

きみも笑うと思い込んでた。

きみのきもちもわからないのに。

ボクのきもちもわからないのに。

くじびき

あたり。はずれ。あたり。はずれ。あたり。あたり。

「はずれの人たちで、今日の放課後お掃除してね」。

先生はゆっくり言った。

俯くと、手のひらにははずれくじ。

友人はそつと同情したけど、同情するのはボクがきみにだろ。

教室掃除のお相手は、みんなの憧れかわいいあの娘。

はずれくじなんてとんでもない。

なによりの宝物だったよ。

おおあたり。

このチャンスに、目一杯あの娘にアピールするんだ。

自然に「すき」って言えるように。

けっこう本気なんだぜ。

冗談ぽく聞こえるのは、案外照れ隠しだったりするんだぜ。

そんな薄っぺらいこと言うのは、案外苦手なんだぜ。

うまくいかないけど、けっこう本気なんだぜ。

キミが好きだ。これ以上ないくらいに。

世界で一番好きだ。

冗談ぽく聞こえるのは、案外照れ隠しだったりするんだぜ。

好きって簡単には止まらない感情。

笑えるかなんてその時次第だから、いちいち悩むのはアホらしい。

だからまっすぐ届くように。

ずっと、キミのこと、好きなんだ。

こころが揺れた。

ふとした瞬間に、ふわり、こころが揺れた。

見慣れているはずの君の横顔なのに。

君ってこんな表情もできるんだって、きづいた。

そのとき、こころが揺れたよ。

固く閉ざしていた、ちっばけなこころが揺れた。

なんだかね、いつもと違うの。

「好き」ってのとはちょっと違う。

それよりも、見てて和む、そんな感じ。

ねえ、これも「好き」ってことなのかな？

よくわかんないや。不思議だね。

大人になったらわかるのかな。

ねえ、教えてよ――

さあ行こう。

クヨクヨしたって時間の無駄さ。

十年後に、絶対後悔するって！

今日明日のこと変えるなら、思いきって即行動！

最初は誰も臆病なだけさ。

だいじょうぶ、きつとうまくいくって。

イメージできたなら、さあ行こう。

キミに手招きをしてるのは、きつと明るい未来だから。

前だけを見るのが不安になったら、いつでも振り返って良いから。

だから、勇気を出して一歩進んでみようよ。

きつて景色がやさしくなるさ。

悩むくらいなら、さあ行こう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4052y/>

二百文字詩集「コトダマのざわめき」

2011年11月20日21時22分発行